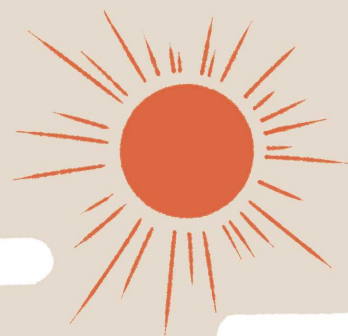


企画展

遠藤周作と狐狸庵

おどけと哀しみが交わるところ



会期
2025年
3月8日(土) ~ 9月23日(水)
2026年

遠藤周作は『沈黙』（新潮社・1966）をはじめとする純文学作品を書く一方で、「狐狸庵山人」と自らを称してユーモアエッセイを書きました。1970年代には〈ぐうたらシリーズ〉が百万部を超えるベストセラーとなり、ネスカフェゴールドブレンドのテレビCM（違いがわかる男）に作家としては初めて起用されるなど、その顔は「狐狸庵先生」として知られ、一躍人気作家となりました。この遠藤周作のもう一つの顔とされる「狐狸庵」とは、いったいいつから生まれたのでしょうか。また遠藤は何故この「狐狸庵」というもう一人の自己をつくったのでしょうか。本展ではその秘密に迫ります。

おどけと哀しみの原点

父親の仕事のために一家で大連に移り住んでしばらくすると、遠藤が小学三年生の頃に両親の關係が次第に悪くなる。子供心にもその家庭の不和がつらく、幼い遠藤は悲しさから逃れるように、学校の帰りに寄り道をし、当時飼っていた愛犬に胸の内を話すなどしていた。幼少期の大連の記憶は遠藤の中に暗い影を落とした。この頃から自分の悲しさをかくすために悪戯をし、おどけるという性格が形成された。やがて自己の痛みとしての「悲しみ」は、その後経験する戦争、フランス留学、肺結核による入院生活を経て、他者と結びつく「哀しみ」へと発展していく。

戦争体験と狐狸庵の誕生

その後、ふたたび『膝栗毛』を読もうと本気で考えたのは空襲の烈しくなりかけた戦争中だった。当時、私は慶応の予科生だったが、同じ年輩の学生が万葉集とか皇道哲学とか、葉隠の話ばかりするのが苦しかったため、意識的にこの『膝栗毛』を探してきて、弥次・喜多のふたりのなかに「失われた日本人」を見つけようとしたことを覚えてい

「十返舎一九」『人物日本の歴史16』

■遠藤周作と『東海道中膝栗毛』

遠藤が10歳の時に両親の離別が決まり、母と兄と遠藤は大連を離れ、小中学時代を主に西宮市で過ごした。中学時代の少年遠藤が当時熱中したのが、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』の世界。中学生の遠藤は登場人物の弥次・喜多を「ぐうたら人間」の象徴と捉え、その生き方に憧れを抱いた。やがて太平洋戦争下で戦局が烈しくなり、慶應義塾大学の予科生になった頃、再びこの本を手にした。



灘中学三年の頃

中学時代は能力別クラス編成で、一年は一番成績の良いA組だったが、二年はB組、三年はC組と下がり、四年と五年は最下位のD組だった。中学卒業後は浪人生活を送る。



1930年頃、中国・大連で
兄・正介（左）と周作



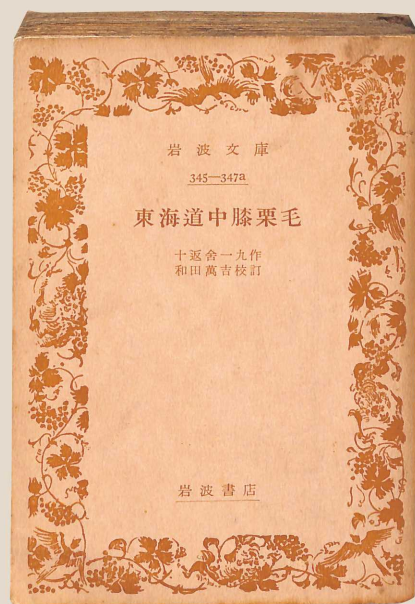
「十返舎一九」原稿

『人物日本の歴史16 庶民の芸術』（小学館、1976年6月）に収録。遠藤は主人公たちが哀愁と同時に持つ楽天性が『膝栗毛』の魅力であると語る。

『東海道中膝栗毛』

岩波文庫 1957年2月

主人公の弥次郎兵衛と喜多八が旅先で繰りひろげる悪戯や失敗や庶民の暮らしを描いた江戸後期に人気を博した滑稽本。中学生の遠藤は弥次喜多道中に憧れ友人と西宮から京都まで西国街道をのぼろうと試みたが途中で断念した。発行年から中学時代に読んでいたものではなく、後に買い直したと思われる遠藤の蔵書。



文学への志と狐狸庵の萌芽

1950年6月、終戦後まだGHQ占領下であった日本から最初のフランス留学生として渡欧した遠藤は、約一月の航海ではじめて日本の外で東洋と西洋の違い、戦争が残した爪痕を肌で感じた。もともと文学研究に進むための留学だったが、遠藤はこれらに見聞きした体験から、目の前にある人間の苦しみから目を背けず、共に苦しみ生きていくことを文学で実践していくと決意し、小説家の道に進む。

現代の青年の一人として、この時代のかなしみや苦悩を他の人と共に背負わねばならぬ。さらにぼくがカトリック信者である以上、その不合理、不正は勇気をもってたださねばならぬ。

しかし、どうしたらいいのか、どこから手をつけるべきか、ぼくにはまだわからなかった。そういう意味で、ぼくは真の赤ゲットでした。未知の国や異民族を初めて見るたびごとに、ぼくは彼らの善さ、美しさが初めてわかりました。彼らが悲しみ、苦しんでいる事実を知りました。

「赤ゲットの佛蘭西旅行」「ルーアンの丘」

*赤ゲット 地方から都会見物に来た人。お上りさんの意。明治初期、東京見物の旅行者が赤い毛布を羽織っていたところからいった。慣れない洋行者にもいう。

「赤ゲットの佛蘭西旅行」

留学時代に書かれた紀行文「赤ゲットの佛蘭西旅行」は当時、遠藤の母・郁が編集をしていた「カトリック・ダイジェスト」へ滞在中のフランスから寄稿し連載（1951・11（1952・7））された。四等船客での渡欧体験や大学がはじまる前の二ヵ月間を過ごしたルーアンのフランス人家庭での生活が描かれている。紀行文の前半はのちの「狐狸庵もの」へぐうたらシリーズ」にも通じる軽妙なタッチであるのに対し、後半は次第にキリスト者、文学を志す者としての決意などが語られ、シリアスな面が色濃くなっていく。

遠藤の著作としてはじめて狐狸庵的要素を内包した文章で表現された本作からは、小説家を志した若き日の遠藤が、人間の哀しみに眼差しを向けながら自らの文学テーマを模索する心の変遷が垣間見える。

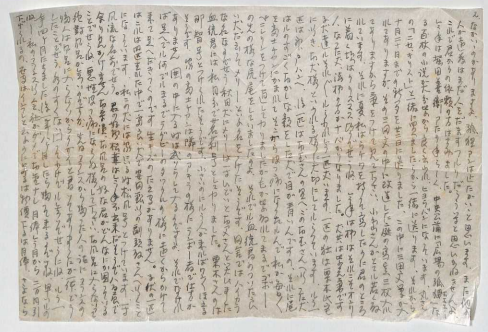


写真：個人蔵

日本版「カトリック・ダイジェスト」

(1948年5月～1953年12月、全68冊)

日本版の編集長は遠藤母子の精神的指導者だったペテル・J・ヘルツォグ神父で、途中から編集員に遠藤の兄・正介、母・郁が顧問として加わった。遠藤は留学中「フランスの街の夜」（1951年8月号掲載）を寄稿し、同11月号から「赤ゲットの佛蘭西旅行」（全9回）を連載し好評を得た。帰国後1953年4月号から編集長に就任、「続赤ゲットの佛蘭西旅行」（全9回）を連載している。



遠藤秀子 遠藤あて書簡

1951年11月5日消印

父の再婚相手である秀子から留学中の遠藤へ宛てたもの。冒頭が欠落しているため内容の詳細は不明だが、「狐狸アン（狐狸庵）は止（よし）たがいいと思います。また他の人が遠藤はまだ人をだますつもりだろう等と思いかねませんよ。」と忠告している。遠藤がこの頃から創作活動で狐狸庵の名を使おうとしていたことが窺える。



フランス留学時に遠藤が家族やヘルツォグ神父に宛てた書簡

井上洋治との出会いに触れたマルセイユ到着前の地中海船上で書いたものや下宿先（リヨン・カトリック大学寄宿舎）が決まるまでに滞在したリヨンの神学校での生活のことなどを知らせる手紙。「フランスの街の夜」「赤ゲットの佛蘭西旅行」の原稿を含む13通。



1950年6月4日、フランスへ出航の日、横浜港に停泊中のマルセイエーズ号で

右より、三雲夏生、三雲昂、遠藤、岩瀬孝（写真提供：軽井沢高原文庫）

小説家遠藤周作と狐狸庵山人

小説家遠藤周作のなかで「狐狸庵山人」が確立されはじめる節目と考えられるのが、1960年からの肺結核再発による入院生活である。

遠藤はエッセイで、この病床体験の後に「狐狸庵」と「ふたたび、つきあうようになった」と述べ、その理由については、入院生活で考えが変化し、中学時代に愛読した『東海道中膝栗毛』の弥次喜多の世界に通じるもの、「根なし草の人間の劣等感」「人生の寂しさ」を背負った人々が聖書にも描かれていることに気づいたからだと言語る。

病床体験によって遠藤文学の新たな方向性が拓かれていき、人間の苦しみや哀しみにそがれる「イエスの眼差し」や「苦しみの連帯」「生活と人生の違い」ということが明確に描かれるようになるが、それに呼応するように、小説家として遠藤が意図的に「狐狸庵山人」を創作の表舞台に出していたことは何を意味するのか。

病床体験と狐狸庵

駒場のわが狐狸庵に移り住んでから、三年にちかい。

猫の額のような小さな庭と家とであるが、それでも五月ごろ苗を植えておいた糸瓜へちまが玄関前の棚を這って、青々とした影をつくるのである。

六月の淫雨がやむころ、この葉と葉との間に黄色い花が咲いては散り、やがてあのブラリとしたへちまの実がみのる。私はこ

のブラリの下に椅子をもちだしてはそこで何もせずにポカンと座っているのが好きである。そして、あまり陽ざしが心持よいと、そこで居眠りをすることもある。

「不法法随筆 なんじゃら狐狸庵閑話」

■入院中から名乗っていた狐狸庵山人

遠藤が「狐狸庵山人」を名乗ったのは、1960年から二年以上に及んだ肺結核の再発による入院生活を終えた後、駒場の自宅で療養中に書き始めた「狐狸庵日乗」と題した絵日記（上・中・下）からと考えられていたが、実際は、入院して間もなく連載されたコラムですでに、その頃住んでいた駒場の自宅を「狐狸庵」と呼び、自らを「狐狸庵主人」と称して執筆していた。現実では入院先の病室で執筆しているにもかかわらず、庭の四季の移ろいを記し、糞尿譚を含む様々な事がらを心赴くままにユーモラスに書いており、病床に伏していることは表に出てこない。しかし時折人生について語る感傷的な一面をのぞかせる。のちにベストセラーにもなる〈ぐうたらシリーズ〉や〈狐狸庵もの〉というひとつの遠藤文学のジャンルを確立した「狐狸庵」は、人生の次元で語りかける小説家遠藤周作の言葉をエッセイという形で生活の次元に置き換え、日常の生活を生きる読者に響く形で伝えるための手法でもあったと言えるだろう。



『満潮の時刻』（「潮」1965年1～12月）

『哀歌』（講談社、1965年10月）

肺結核再発の病床体験と長崎で踏絵を見る体験をもとにした作品で、のちの『沈黙』（新潮社、1966年）の創作へとつながる入院生活中の遠藤の内的体験の過程を追うことができる。『満潮の時刻』は『沈黙』執筆時期に連載されるも単行本化されことなく、遠藤没後の2002年に新潮文庫から刊行された。



「不法法随筆 なんじゃら狐狸庵閑話」（『内外タイムス』1960年7～8月）

東大伝研病院入院中に連載したコラム。連載時は当時住んでいた駒場の自宅を狐狸庵と呼んでいるが、のちに収録された『ぐうたら好奇心』（講談社、1974年1月）では駒場から転居した玉川学園の自宅を狐狸庵とする設定に変更が加えられている。



1960年、遠藤37歳、入院している慶應義塾大学病院で

遠藤は1960年4月、肺結核再発で東大伝研病院に入院し、同年末に慶應義塾大学病院へ転院。翌年1月に二度手術を受けるが失敗し、同12月に危険を伴う三度目の手術を受け、1962年5月に退院した。この病床で遠藤は神の存在を問い直し、死と孤独に向き合う苦しみを経験しながらも、療友と花札やポーカー、模型飛行機制作や悪戯をするなど明るく振舞った。

桃源社から刊行された「狐狸庵もの」

関西弁の「こりゃ、あかんわ」から「狐狸庵閑話」と名付け、刊行物として初めて「狐狸庵」の名前を用いた。

『狐狸庵閑話』1965年7月
『現代の快人物』1967年5月
『古今百馬鹿』1967年12月



「生活」と「人生」を豊かにする好奇心！

遠藤は本業の小説家の仕事とは別に、大規模な素人劇団「樹座^{きざ}」を立ち上げ、29年間でほぼ毎年の公演と海外公演を実現させたほか、コーラス、社交ダンス、漢詩、俳画、碁、書道、ピアノなど多岐にわたる手習いをするほど非常に旺盛な好奇心の持ち主でもある。

遠藤は「生活」と「人生」を区別して考え、それらを豊かに彩るために大切なのは好奇心だとよく述べている。目に見える「生活の次元」での失敗や挫折は、目に見えない「人生の次元」では必ずしもマイナスばかりではない。この目に見えない魂の領域とも言える「人生」をより良くするには、日常にある「生活」も大切にしよう。

遠藤は「狐狸庵」という名によって純文学作家としての固いイメージをつき崩し、読者との距離を縮め、自身の文学のフィールドを大きくしていった。その原動力は、人生と人間に対する類まれな好奇心があったからだと言えるだろう。

私はこの狐狸庵という名のおかげですれば狭くならがちな自分の世界を拡げることができた。そして生活の上でも本当にたくさんの方たちをここに持つことができた。遠藤周作の本は読まなくても狐狸庵という別称は知っていて、向うから親しく近よってくれる人が多かったからである。そのおかげで私はこの年齢になるまでかなり楽しく人生を送れたと思う。

「自分の名について」『春は馬車に乗って』



劇団「樹座^{きざ}」

1977年2月、第5回公演「カルメン」エスカミリー役でジプシーたちに囲まれ熱唱する遠藤。1968年から1995年まで20回の定期公演のほか、二度の海外公演（ロンドン、ニューヨーク）を行い、1997年の遠藤座長追悼公演をもって解散した素人劇団。スローガンは「生活の中に人生を！」。



社交ダンス

足腰を鍛えるために始めた遠藤のダンスを見て、北杜夫は「あれは柔道の乱取りをしているのですか」と言ったそう。「サロン・ド・ロワ・ポーブル」（貧しい王様のサロンという意）という社交ダンスの会も結成した。（撮影：稲井勲）



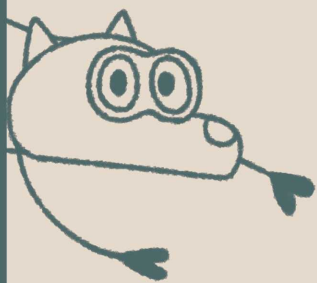
コール・パパス

音痴のお父さんを集めたコーラスグループ。参加条件は遠藤と同じように、徹底的に音痴で楽譜が読めないこと。月二回の専門家による指導練習を重ね、発表会も行った。前列左が遠藤。



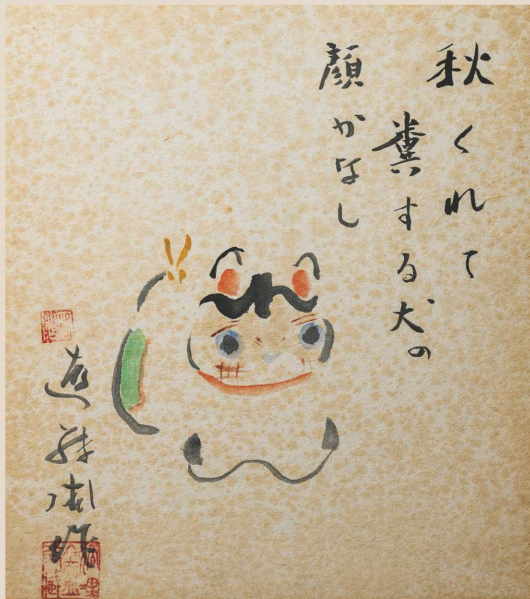
宇宙棋院^{うちゅうきいん}

「日本棋院」を超えるという意気込みで名付けた、碁を知らない作家や編集者らと設立した囲碁の会。公式戦を年に三回、名人戦、棋聖戦、本因坊戦が行われ免許状も渡された。（撮影：稲井勲）



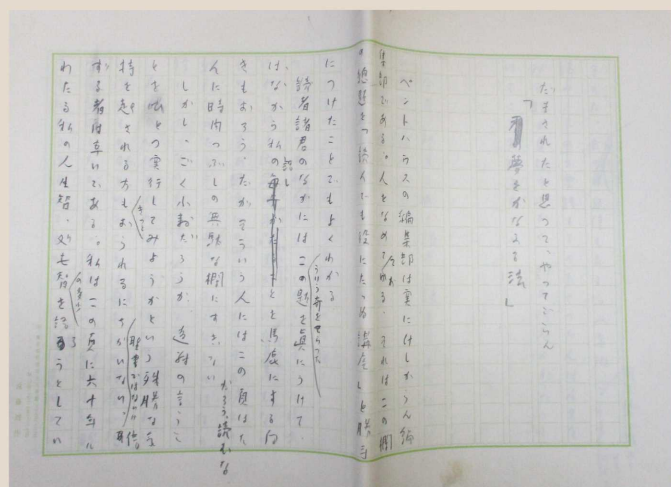
遠藤自筆俳画

劇団「樹座」のサークルとして絵画教室をつくり画家の秋野卓美に指導を仰いだ。参加者はそれぞれに画家としての名前がつけられ、遠藤はバロック期の画家「ヴァン・ダイク」の弟子として「ニチヨウダイク」を名乗った。



この周作塾で私が諸君に教えたことは、毎日の生活や人生を自らの「好奇心」の欠如のためにツマらぬものにするな、ということなのだ。そしてちよつと頭をひねれば生活や人生はゆたかな色彩になるだろうし、奥ゆきも深くなることを私の経験から諸君に伝えたいのである。

『周作塾 読んでもタメにならないエッセイ』



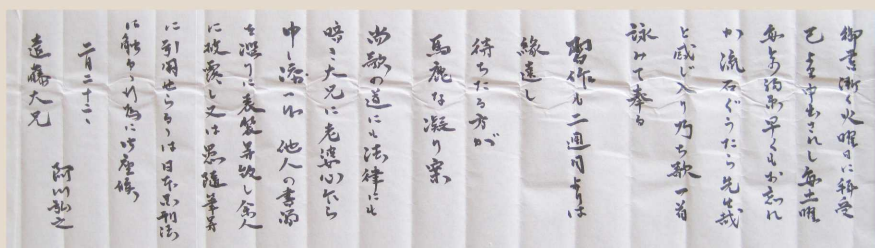
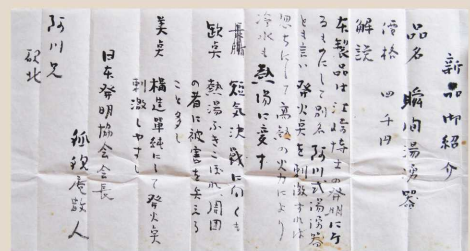
原稿「周作塾 読んでもタメにならないエッセイ」

「PENTHOUSE」〔日本版〕1984年5月～1987年12月連載。全44回。

遠藤が塾頭となり宇宙、宗教、心理学、科学、恋愛、ギャンブル等幅広い講義テーマをユーモラスに語る。このなかで遠藤は「狐狸庵」という名によって「人生探究心と生活好奇心の二つを併存させ、それを共に成長させられた」と語る（「名前を二つか三つ持とうよ」）。専属イメージモデルに竹中直人を起用し遠藤の物まねが話題となった。



撮影：旧日本土木工業協会



阿川弘之との毛筆による往復書簡（上／遠藤発信、下／阿川発信）

文筆家としての教養と品格を備えるために「お習字」をはじめようと週一回出す約束で交わされた往復書簡。早々に約束は反故になり、罰金の要求や罵りあいの知恵比べに発展。旧知の間柄であるゆえのユーモアを感じる。『狐狸庵交遊録』（河出文庫、2006年9月）に翻刻収録。

〔新資料〕

未発表自作文集「メリノの歌」

遠藤が慶應義塾大学予科生だった1944、45年にかけて、友人からもらったアルバムに自作の詩やエッセイなどを断片的に記した自作の文集。本文のなかには当時の遠藤の写真等が数枚貼られている。文集のタイトル「メリノの歌」は遠藤の筆跡で扉に記されている。本資料の「あとがき」によると、もともと自費出版を予定していたところ、紙の入手困難のためにこの形式で遠藤自らが作製した事情が記されている。さらに、「あとがき」では自身を「なまぐさ」と呼び「狐狸庵亭主人敬白」と書き落款を押しており、この時期から遠藤が「狐狸庵」の名を用いていたことが知れる。幼いころから悲しい時こそおどける遠藤。「狐狸庵」の誕生には、戦時下で鬱屈としながら過ごした青春やその慰めとなった『東海道中膝栗毛』の影響が無関係とは言えないだろう。

戦時下の暗さのなかで生まれた「狐狸庵」というもう一人の自己を使っておどけながらも、弥次喜多の中にある劣等感や人生の寂しさに自らを重ね合わせる青年遠藤の視線の先には、人間の哀しみに眼差しを向けるその後の遠藤文学への道筋がすでに示されているかのようだ。



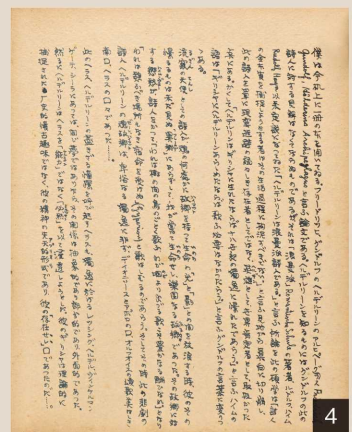
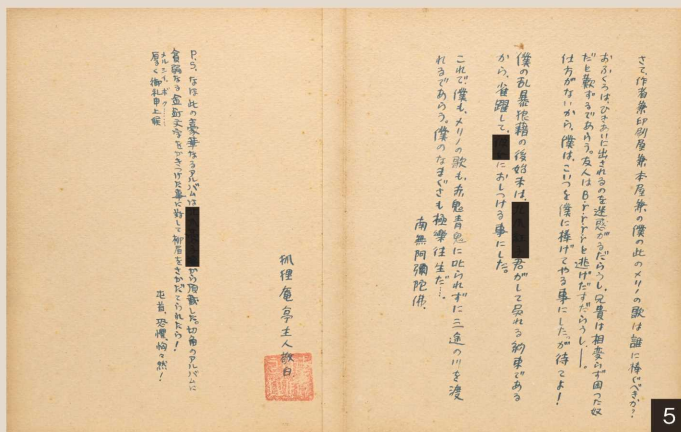
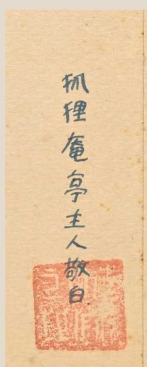
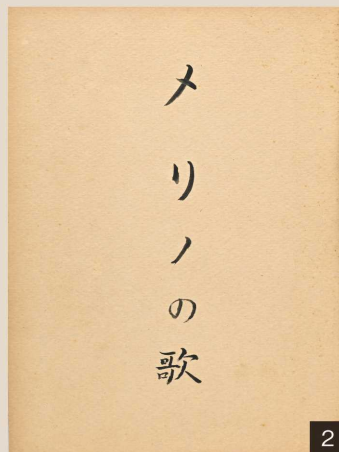
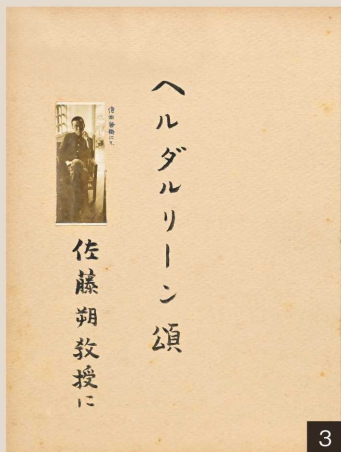
個人蔵
提供：新潮社

1. 表紙
2. 扉・遠藤直筆のタイトル
3. 二章扉・佐藤朔宛て献辞
4. 二章本文
5. あとがき



1944年夏、慶應義塾大学予科の寮の友人たちと
(右から一人目が遠藤)

戦局苛烈のため授業はほとんどなく、川崎の勤労動員の工場で働く。文科の学生の徴兵猶予制が撤廃されたため、この年徴兵検査を受けるが、肋膜炎を起こした後のため第一乙種で入隊一年延期となり終戦を迎えた。



関連イベント

その他の展示

1. 遠藤周作と清水崑～「狐狸庵閑話 人情編」がつなぐ交流～

場所:遠藤周作文学館 常設展示室

遠藤周作の新聞連載エッセイの挿絵を担当した長崎市出身の漫画家・清水崑との交流を3回に分けて展示します。

第1回 二人をつないだ、長崎、キリスト教

2025年3月8日(土)～9月11日(木)

第2回 遠藤周作「狐狸庵閑話 人情編」

2025年9月13日(土)～2026年3月12日(木)

第3回 清水崑「長崎の春夏を遊ぶかっぱ展」

2026年3月14日(土)～9月23日(水)

2. 遠藤周作生誕100年記念事業メモリー展

場所:遠藤周作文学館 聴濤室

2025年3月8日(土)～2026年9月23日(水)

令和4～5年度に長崎市が実施した遠藤周作生誕100年記念事業をパネルで紹介します。

文学講座

遠藤周作と狐狸庵

～展示資料を中心に企画展の魅力を語る～

講師:当館学芸員

日時:2025年3月15日(土)13～15時

場所:遠藤周作文学館

定員40名 FAXか電話で申し込み(3月13日(木)17時締切)



長崎市遠藤周作文学館

〒851-2327 長崎市東出津町 77 番地 TEL 0959-37-6011 / FAX 0959-25-1443

開館時間 午前 9 時～午後 5 時 (入館受付は午後 4 時 30 分まで)

休館日 12 月 29 日～1 月 3 日

料金 一般360 (260) 円、小・中・高校生200 (100) 円 () 内は10名以上の団体料金

長崎市遠藤周作文学館

検索



Instagram



X